



矢島 渚男 選

借景に大和三山大根干す

東大阪市 土屋 鉄男

【評】干し大根越しに奈良盆地を見渡せ、香久山・畝傍山・耳成山が見える所だ。古代の歴史の興亡も万葉の歌なども浮かんでくる。運動会戦さ最中の国旗あり

宝塚市 広田 祝世

【評】運動会には平和な万国旗。しかし、今はその中に記憶に新しい国旗が混じっている。戦場になつていく国々だ。なんで人間は戦争ばかりしているのだろうか。

秋の蝶それでも風の来る方へ

大月市 米山 明博

【評】弱い秋の蝶だなど見ていると、やがて風の吹いてくる方へ向かって飛んでいった。かすかに花の匂いを感じたのだろうか。夜爪切り深爪となる神の留守

高槻市 村松 譲

秋の風平城京跡木のベンチ

木津川市 永岡 操子

思い出に脚色をして日向ぼこ

京都市 根来美知代

ハローウィン時に狂つてみたくなり

大阪市 出利葉 孝

秋深し片想いには慣れぬもの

東京都 関根ともみ

外に出て郵便待てば雁渡る

盛岡市 久保 直

下り坂に背中照らされ秋の暮

君津市 佐藤 鮎美

宇多喜代子 選

だしぬけに風の湧きけり霧の中

東京都 杉中 元敏

【評】あたりの見えない霧の中に立っていて風が突然吹いてきたのだがその風を「湧く」と表現した句。予測していないものとの出会いである。老眼鏡掛けて外してそぞろ寒

白井市 毘舍利道弘

【評】高齢者に共感を抱かせる句だ。何をすることも眼鏡をかけた外し方。ときに置き所を忘れたり。「そぞろ寒がまごごにびつたりである。鳥海山も月山も見ゆ冬支度

酒田市 兵田 一子

【評】鳥海山も月山もよく知られた名山である。この山が見えるところにお住まいとは羨ましい限り。いつも見ている山が暮らしの指針となっている。幼な子の撫まり立ちや冬青空

横浜市 岡 まゆみ

秋出水島の祭りの人まばら

袖ヶ浦市 浜野まさる

鞆には葉袋ばかり十二月

加古川市 東田 強

七五三姉はやさしく妹と

岐阜市 鈴木 隆

どこからか子のはしや声十三夜

熊谷市 小林 幸子

魚売る潮焼け声や十二月

佐野市 村野 則高

旅終へて煮豆ふつつ初しぐれ

深谷市 大橋 松枝

正木ゆう子 選

鷹渡る岬の果ての危草

横浜市 小野寺 洋

【評】危草とは崖などの危険な場所に生えている草。岬の突端から海上へ去りゆく鷹をよく見るために、草を踏みしめているのだろうか。危草という古風な言葉が効果的である。小鳥来るとも小さな精米器

土浦市 小川 智昭

【評】家庭用の小さな精米機と小鳥を取合わせたのだが、二つの小の字と、「とても」が愛らしく、世界の片隅の小さな平和が描かれた。君たちに秋思あるのか椋鳥よ

東京都 佐藤 ゆう

【評】命あるものの尊さは平等ではあるけれど、朝夕の椋鳥の群のすさまじさにはちよっと。閉口するとうか、感心するというか。秋惜しむ消化試合の人生と

前橋市 山本 亨

サクサクのパイのズッシリ林檎かな

松原市 古沢 昌代

骨黒き烏骨鶏とや秋の風

藤岡市 飯島加津枝

地を這へば蝶も地を舞ふ乱れ萩

東京都 望月 清彦

息継ぎもできないくらい金木犀

茨城県 笠原 真枝

十階にふと木犀の香りかな

富山県 川上 純一

木犀のちる金十字銀十字

足利市 長 芳男

小澤 實 選

小春日や巻爪はニッパで切る

静岡市 山本 正幸

【評】ふつうの爪切りでは切りにくい巻爪であっても、ニッパ型爪切りならば、容易に切ることができよう。小春に恵まれた、休日の午後であろうか。やりとげた感あり。常温の酒とおでんとそれでよし

所沢市 仲村 一郎

【評】ひとりの晩酌には、特別なものはいらぬ。日本酒は冷やさなくても、あたたかなくてもいい。肴はおでんをあたたかめるだけでいい。滾る湯に袋の蝗ぶちまけし

東京都 天地わたる

【評】田で捕ってきた蝗が、布袋いっぱいにある。その蝗を茹でようとしているのだ。「ぶちまけし」でかなりの量であることが知られる。秋晴や鳥居は異界への戸口

青梅市 松野 英昌

行く秋やクラタン皿に残る焦

福山市 松崎 映子

あつあつの大根のどを通りけり

守谷市 久保田洋二

名画座の手描きポスターそぞろ寒

日立市 菊池 三夫

金網に軍手並ぶや秋日和

東京都 伊藤 直司

味噌揚げや軒減りし隣組

川崎市 関 直彦

山霧の落ち込む谷の深さかな

神戸市 岸下 庄二